

清経

世阿弥作

季は 地は ワキ
冬 京都 ツレ 淡津三郎
シテ 女 左中将清経

「八重の汐路の浦の波。八重の汐路の浦波。九重に
いざや帰らん。

詞

「是は左中将清経の御内に仕へ申す。淡津の三郎と
申す者にて候。さても頼み奉り候ふ清経は。過ぎ
にし筑紫の軍に打ちまけ給ひ。都へはとても帰ら
ぬ道芝の。雑兵の手にかゝらんよりはと思し召し
けるか。豊前の国柳が浦の沖にして。更け行く月
の夜船より身を投げ空しく為り給ひて候。又船中
を見奉れば。御形見に鬢の髪を残し置かれて候ふ
間。かひなき命助かり。御形見を持ち。唯今都
へ上り候。

道行

「此程は。鄙の住居に馴れく。く。たまく
帰る故郷の。昔の春に引きかへて。今は物うき秋
暮れて。はや時雨ふる旅衣。しをるゝ袖の身のは
てを。忍びくに上りけり。く。

ワキ詞

「急ぎ候ふ程に。是は早都に着きて候。如何に案

内申し候。筑紫より淡津の三郎が参りて候ふそれ／＼御申し候へ。

ツレ「何淡津の三郎と申すか。人までもなし此方へ来り候へ。さて只今は何の為めの御使にてあるぞ。

ワキ「さん候面白もなき御使参りて候。

ツレ「面白もなき御使とは。若し御遁世にてあるか。

ワキ「いや御遁世にても御座なく候。

ツレ「過ぎにし筑紫の軍にも御つゝがなきとこそ聞きつる

に。

ワキ「さん候過ぎにし筑紫の軍にも御つゝが御座なく候ひしが。清経心に思し召すやうは。都へはとても帰らぬ道芝の。雑兵の手にかゝらんよりはと思し召されけるか。豊前の国柳が浦の沖にして。更け行く月の夜船より身を投げ空しくなり給ひて候。

ツレ「なに身をなげ空しくなり給ひたるとや。恨めしやせめては討たれもしさ又。病の床の露とも消えな

ば。力なしとも思ふべきに。我と身を投げ給ふ事。
偽りなりつるかねことかな。實に恨みても其かひ
の。なき世となるこそ悲しけれ。

下歌地
「何事もはかなかりける世の中の。

上歌
「此程は。人目をつゝむ我宿の。く。垣ほの薄吹

く風の。声をも立てず忍音に。泣くのみなりし身
なれども。今は誰をか憚りの。有明月の夜たゞと
も。何か忍ばん時鳥。名をも隠さで鳴く音かな。

く。

ワキ詞

「又船中を見奉れば。御形見に鬢の髪を残し置かれ
て候。是を御覧じて御心を慰められ候へ。

ツレ
「是は中将殿の黒髪かや。見れば目もくれ心消え。
猶も思ひのまさるぞや。見る度に心尽しの髪なれ
ば。憂さにぞかへす本の社にと。

地
「手向けかへして夜もすがら。涙と共に思寝の。夢
になりとも見え給へと。寐られぬにかたぶくる。

枕や恋を知らすらん。／＼。

シテサシ

「聖人に夢なし誰あつて現と見る。眼裏に塵あつて三界すぼく。心頭無事にして一生ひろし。實にや憂しと見し世も夢。つらしと思ふも幻の。いづれ跡ある雲水の。行くも帰るも閻浮の故郷に。たどる心のはかなさよ。転寐に恋しき人を見てしより。夢てふ者は頼み初めでき。如何にいにしへ人。清経こそ参りて候へ。

ツレ
「不思議やなまどろむ枕に見え給ふは。實に清経にてましませども。正しく身を投げ給へるが。夢ならで如何で見ゆべきぞ。よし夢なりとも御姿を見々え給ふぞ有難き。さりながら命を待たで我と身を。捨てさせ給ふ御事は。偽りなりけるかねとなれば。唯恨めしう候。

シテ

「さやうに人も恨み給はゞ。我も恨みは有明の。詞

「見よとて送りし形見をば。何しに返させ給ふらん。

ツレ「いやとよ形見を返すとは。思ひあまりし言の葉の。見る度に心づくしの髪なれば。

シテ詞「うさにぞかへすもとの社にと。さしも贈りし黒髪を。あかずは留むべき形見ぞかし。

ツレ「愚と心得給へるや。慰めとての形見なれども。見れば思ひの乱髪。

シテ「分きて贈りしかひもなく。形見をかへすは此方の恨み。

ツレ「我は捨てにし命の恨み。

シテ「互にかこち。

ツレ「かこたるゝ。

シテ「形見ぞつらき。

ツレ「黒髪の。

地「恨みをさへに言ひそへて。く。くねる涙の手枕を。ならべて二人が逢ふ夜なれど。恨むれば独寐の。ふしぐなるぞ悲しき。実にや形見こそ。中々

憂けれ是なくは。忘るゝ事もありなんと。思ふも
ぬらす袂かな。／＼。

シテ詞
「古への事ども語つて聞かせ申し候ふべし。今は恨
みを御晴れ候へ。さても九州山鹿の城へも。敵よ
せ來ると聞きし程に。取る物も取りあへず夜もす
がら。高瀬船に取り乗つて。豊前の国柳といふ所
に着く。

地
「實にや所も名を得たる。浦は並木の柳蔭。いと仮
初の皇居を定む。

シテ
「それより宇佐八幡に御参詣あるべしとて。

地
「神馬七疋。其外金銀種々の捧物。即ち奉幣のため
なるべし。

ツレ
「かやうに申せば猶も身の。恨みに似たる事なれど
も。さすがに未だ君まします。御代のさかひや一
門の。果をも見ずして徒に。御身一人を捨てし事。
誠によしなき事ならずや。

シテ「實にく是は御理りさりながら。頬みなき世のしるしの告。語り申さん聞き給へ。

地「そもそも宇佐八幡に参籠し。さまで祈誓怠らず。数の頬みを掛巻も。忝くもみとしろの。錦の内より新なる。御声を出だしてかくばかり。

シテ「世の中の宇佐には神もなき物を。何いのるらん心づくしに。

地「さりともと思ふ心も虫の音も。弱りはてぬる秋の暮かな。

シテ「さては仏神三宝も。

地「捨てはて給ふと心細くて。一門は。氣を失なひ力を落して。足弱車のすごくと。還幸なし奉る。あはれなりし有様。

クセ「かゝりける処に。長門の国へも。敵むかふと聞きしかば。また船に取り乗りて。何くともなくおし出だす。心の内ぞあはれなる。實にや世の中の。

うつる夢こそ誠なれ。保元の春の花。寿永の秋の紅葉とて。散々になり浮ぶ。一葉の船なれや。柳が浦の秋風の。追手がほなる跡の波。白鷺の群れ居る松見れば。源氏の旗をなびかす。多勢かと肝を消す。こゝに清経は。心にこめて思ふやう。さるにても八幡の。御託宣あらたに。心魂に残ることわり。誠正直の。頭にやどり給ふかと。唯一筋に思ひ取り。

シテ
「あぢきなや。とても消ゆべき露の身を。

地
「猶置き顔に浮草の。波に誘はれ。船にたゞよひていつまでか。憂き目を水鳥の。沈みはてんと思ひ切り。人には言はで岩代の。待つ事ありや暁の。月に嘯く氣色にて。船の舳板に立ちあがり。腰よりやうでう抜き出だし。音も速に吹き鳴らし。今様を歌ひ朗詠し。來し方行く末をかゞみて。終にはいつかあだ波の。帰らぬは古へ。止まらぬは心

づくしよ。此世とても旅ぞかし。あら思ひ残さず
やと。よそ目にはひたふる。狂人と人や見るらん。
よし人は何とも。見る目を仮の夜の空。西にかた

ぶく月を見れば。いざや我もつれんと。南無阿弥
陀仏弥陀如来。迎へさせ給へと。唯一声を最期に
て。舟よりかつぱと落汐の。底の水屑と沈みゆく。
うき身の果ぞ悲しき。

ツレ「聞くに心もくれはとり。憂き音に沈む涙の雨の。

恨めしかりける契りかな。

シテ「いふならく。那落も同じうたかたの。あはれは誰

もかはらざりけり。さて修羅道に遠近の。

地「さて修羅道に遠近の。たづきは敵雨は矢先。土は
清剣山は鉄城。雲の旗手をついて。嬌慢の剣をそ
ろへ。邪見の眼の光り。愛欲とのるちつうげん道
場。無明も法性も。乱るゝ敵打つは波。引くは潮。

西海四海の因果を見せて。是までなりや誠は最期

の。十念みだれぬ御法の船に。頼みしまゝに疑ひ
もなく。実にも心は清経が。く。仏果を得し
こそ有難けれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第七輯」大和田建樹著